

犬群は大物にも対応できるように、鳴き止めも咬み止めも自在なマロ号、シロ号、ヨシ号の三頭で、午後から交代したばかりで元気に小気味良い狩り込みである。

天気も快晴、無風で獵日和である。相変わらず山裾の民家の飼いだちが私と犬群の動きに反応して鳴き出した。

八合目の猪道も古い足跡だけである。先日北嶋氏が二発撃って逃がした真竹藪の止め現場の上に来た。「あそこだったなあ」と足を止め、ニヤニヤしながらタオルで汗をふく。

「いないなあ」
もうすぐこの大峰は一本の小沢で終わりとなる。一番奥の民家でも犬三頭くらい飼っていて、その小道の峠に加藤さんが待ち構えている。

真竹と篠竹藪の良い獵場が続くが、やはり出ない。犬たちは下の県道近くまで狩っているようで、自動車の音がシーバーに入ってくる。

雑木林の見通しの良い所で犬たちを待っていると、三頭が戻って

猪犬と登る

猪獵の頂点

3

田宮 治

来た。少し離れているが、どうも猪の臭いを取ったようで、三〇分くらい下を小沢のほうに飛んで行った。

猪がいる感じがして、思わず犬たちの後を追うと、まばらに生えた孟宗竹の根元がボコボコに掘り返されている。よく見ると夕べのもので、荒らしぶりから間違いない大物だ。

犬たちはまた下の民家近くまで下りたようで姿は見えない。さらに五〇分も進まない所に、何と大きな寝跡があるではないか。それも枯れ葉の積もった、立ち木もないならかな少しの窪地に土を少し掘っただけのものだ。七〇分くらいの大きなものである。

「今しがたまでここにいたな。狭い範囲しか歩いていない。なかなか出会えなかったのはそのためだ」

そう思いながら、二人に「出ますよ！ 大物が……」と告げている。

ほとんど同時に、すぐ下の真竹藪で鳴き出した。すぐに追い鳴きで、どんどん小沢のほうに向かっている。

こんなまる見えの所で寝ていて犬たちより早く気づき、早立ちして真竹藪でじっと様子を見ていたのだ。

「加藤さん、小沢の奥に向かっています。行きますよ」と連絡するが、どうも犬たちの鳴き声がお

かしい。鳴いて追っているのはヨシ号とシロ号だけである。下の真竹藪は突破するのが大変だ。様子を見ているとマロ号のすごい威嚇が始まった。藪で待ち受けている大猪に咬みに出しているようだ。

「平野さん、私の下にもう一頭おられます。下りて来てください」マロ号は止め芸でも攻め芸でも一流になっている。このまましばらくは一頭で止め置くはずである。

しかし、平野氏は返事もくれず、来てくれない。平野氏には、すぐ右側から雑木林の小峰を下りて、民家の上に回り込み、撃ち止めてほしいと思っていた。突然、まるで初めて寝屋から飛

び出したように猪はドッドッ、ド
ー、バリバリと下に落ちて行く。
マロ号はギャツ、ギャツと必死で
止めようとしているが、すごい荒
猪のようで、グオッ、グオッ、
グッと反撃音が藪中からわき上
がり、戦闘モード突入である。

「よしよし、止めたな」と決心し



ブル号(手前)とマロ号とシロ号の咬み止
め。一〇〇kgくらいまでならば絶対に逃げ
られない強烈なものである。小物ならば全
犬、頭に咬み出る

て真竹藪を避け、平野氏にお願い
し撃ってもらおうつもりの小峰をこ
ろげるように走って、マロ号の鳴
き声の下に回り込もうとした。
しかし、猪はそれに気づきまた
飛んだ。しかも今度は民家目がけ
て一気に突っ走っている。下の民
家では二、三頭の飼犬が狂った
ように鳴き出した。間違いない、
この前の一戦で民家の犬目がけて
飛び下りたあの大物に決まってい
る。あれ以来、全く姿を隠してい
たが、こんな猟場のどん詰まりに
潜んでいたのだ。

「五番さん、取れますか。どう
ぞ!」

全く通じないが、一方的に「峰
筋を車のほうに急ぎ戻ってください
い。大猪が右下の県道ぎりぎりを
飛んでいます。ついて追っている
のはマロ号一頭です。どうぞ
……」と伝える。

私はこれは大変なことになった
と、走りながら次の一手を考えて
いた。この三頭で一〇〇⁺級まで
ならば、うまくすれば刺しもでき
るし、撃つのであれば、この大猪
でも何の心配もないと思ってい

のだが、ヨシ号とシロ号は別の猪
を追って小沢の奥から山を越えた
よう生鳴き声は聞こえない。
シーバーには元気な鳴き声が入っ
ている。タツの加藤氏に任す以外
にない。「加藤さん、頼みますよ」
と、走りながら告げる。

マロ号は一頭だが、止め芸なら
すごい技をもっていて、必ずどん
な猪でも止めきるだろう。しかし
どうもこの猪は大変な荒猪で、こ
の猟場によく来る石橋グループや
長谷川グループにも追われ続け、
戦い続けてきた犬殺しの名物猪の
ようだ。

こんな大猪と何度も戦っていつ
も思い知らされるのが、猪も激戦
ごとに生きる術や猟場に合った逃
走術を学ぶということである。信
じられないことだが、この大猪ぐ
らいになると、私のことも犬たち
の顔も三度目の対戦となるので知
っていると思っている。

というのは、普通の犬たちなら
ば、この猪はまずもって動かさせな
い。追ってタツにはめ込むなどは
至難の技であって、犬芸のできて
いない若犬などは鳴きつくことも

できないものである。
基本的には大猪ほどすぐ止ま
る。止まるのは勝負に出る恐ろし
い攻撃合図なのである。だから、
できない犬と見ると、猪は自信を
持って動かないのだ。

そんな大猪が、マロ号一頭だけ
で攻めているのに早立ちして必死
で逃げまくっているようだ。考え
られないことに民家と飼犬の鳴
き声目がけて、止まっては飛び、
どんどん近づいている。

悪いことに山裾には県道があ
る。何とか先回りして民家や県道
に近づくと、阻止せねばならな
い。全力で飛び下り、やっとのこ
とで民家の上に立てた。

さすがは大猪、そんなことは承
知とばかりに、民家と納屋の間を
突っ走り、その下に細長く続く盃
宗竹に沿って県道ぎりぎりを何と
かマロ号の追跡を断とうと必死で
横に走り続けている。

そして小峰を越えて、とうとう
生の鳴き声は聞こえなくなってい
まった。

「何くそ! こうなったらとこ
とん勝負してやる。大猪が何

だ!

どんな妙技で逃げようと、絶対に追い詰めてやる。そう思って県道のそばで山の様子を見ながら作戦の立て直しである。流れる汗をタオルでふき、思いつ切り水を飲んだ。

追い始めて三十分になる。成り行き上、仕方なく見捨てたヨシ号とシロ号が心配になり、マーカーを確認すると、ヨシ号たちも止め切った。ヨシ号は、かなり遠いがワン、ワン、キャン、キャンの元気なもので、見事な止め鳴きである。

「加藤さん取れますか。ヨシ号とシロ号が猪を止めていますよ。どうぞ」

返事がない。平野氏へも何回となく連絡するがだめである。ヨシ号だって、ブイ号やカツ号だって一頭でも止め切れる実力に育っている。ヨシ号とシロ号ならば決して咬み込みには入らず、鳴き止めで長く止められるはずである。ここは一番、平野氏と加藤君に頑張ってもらおう以外ない。

「さてどうしたものか」と、はや

る気持ちを抑えて、追う先の山並みを見上げると、県道に向かっていくつも小峰が下りていて、その一番遠くに大峰が落ちている。どうもその大峰あたりでマロ号が止めているようだ。シーバーは、まぎれもないマロ号の鳴き止めの声が入ってくる。

「よしよし、マロ、頑張れ! すぐ行くからな」

再び小沢を登り始めた。もうシーバーはマロ号に合わせ切りで、左手に無線機を持ち大きく振りながらの大逃走となった。小峰をいくつも越え小沢を戻り、一時間もひた走ってやっとのことで、マロ号の肉声が聞こえる小峰に立てた。

「ワン、ワン、ワン……」

まるで寄せ鳴きよろしく元気だが、不思議なほど静かで、猪の攻め声は聞こえない。大猪と一時間以上も戦い、止め切っている止め現場とは信じられない落ち着き払ったマロ号の鳴き声である。

問題の止め現場を寄りつく前によく検証すると、真下の大沢に広がる大杉林で、急に杉林が細くな

り上の雑木林に続く急な崖あたりである。

急いで大沢に飛び下り、大杉林を突き進んで杉林の切れた所に出た。マロ号の声はもう目の前。○はくらくらである。相変わらず元気にワン、ワンと吠え続けている。マロ号ただ一頭の鳴き止めである以上、「マロ、頑張れ!」とはとても怒鳴れない。

杉林はもう薄暗く、時計は四時三十分である。「何とか早くせねば」と思うが、大猪だというのに、悪いことに下からの寄り姿も見えない。今日は必ず刺してやると心に決めていたこの決戦ではあったが、マロ号一頭では仕方ない。その代わりに「一発で必ず仕留めてやる。もう少しだ。マロ、頼むぞ……」と祈る気持ちで杉林を抜けて、急な崖下に出た。

急斜面で杉林も植えられない草藪の先にマロ号の勇姿が目に見え込んだ。盛んに尻尾を振りながら、両足を踏ん張り上に向かって吠え立っている。その視線の先五、六層上に、何と大岩のような猪の姿がある。マロ号と睨み合っ

いるではないか。

急な崖続きで、山の崩れた所から小さな峰が下におりている。その中に大きな杉の木が一本あり、そこからちょうど馬の背状にたるみになっている。

その木で身を守るかのように、マロ号は攻め込んでさっと引き下がっている。大猪がよくやる大岩や大木で弱点の尻を守って戦うように、マロ号がお株を奪って堂々と勝負している。

マロ号はこの小峰を飛び下りる大猪を先回りして下で吠えつき、攻め上げたに違いない。たぶん大杉の根元に陣取ったのは大猪のほぞである。それを一時間も攻め続け、たるみにある三層くらいの草木の茂みまで攻め立てたようである。その小さな茂みを間にして攻防している。

もう一時間以上同じ状態で戦っている。大猪は静かなもので、マロ号の攻めに頭を低く突き出し応戦している。

一見すると、下から攻めているマロ号はまくられたらひとたまりもなく、大猪に丸飲みされそうだが



はじめはどんな若犬でも、大猪には強烈な咬みは出ない。ただし、一流犬になる犬は一戦ごとに急成長するので、止め猪は必ず撃ち獲ることである



グループ猟でタツにはめるべく猪を追わせる。甘くなる止め犬の咬み止め芸は、絶えず単独猟で止め撃ちをやるように、きちっと調整しておくことである

が、よく見ていると、どっこいそうではない。大猪が上に逃げるには急斜面で難しいし、右も左も崖で、銃でも撃てば飛び下りるだろう。七、八時離れて吠え続けていけば、たとえ大猪といえども絶対に動けない。

まさに絶妙な居竦めと、吠え止めの見事なもので、これ以上の止め技はないのである。早く撃たねばと杉林から出て草地をそっと進んで狙ってみるが、一〇〇はありそうだ。

こんな見通しの良い小峰に立つ大猪など見たことがない。いつも使っているブローニング06にツァイス二十一倍をつけた銃ならば、杉林まで戻り木に添えて撃てば、たとえ一三〇くらいでも何の心配もなく撃てるのであるが、残念なことに千葉では散弾銃しか使えないのだ。

仕方ない。少しでも寄りつかねばと覚悟を決め、もうこれ以上登れない所まで忍び寄った。ここからだと急斜面の撃ち上げ六〇はである。きちっと首の付け根を狙って静かに撃ち込んだ。

「よし決まり……」と思いきや、大猪はクルッと向きを変え上に飛び出す。「この……」とすかさず二の矢をかけるが、大猪は何事もなかったように崖上の藪に走り去った。

ああ何たることだ。こんな絶好のチャンスも、何という不様だ。マロ号は狂ったように猪に咬みを入れ、また止めようとギヤツ、ギヤツと鋭く食い下がっているようだが、その声もどんどん遠のき、ついに大峰を越えて行った。

しまったと天を仰ぎ、呆然としばらく立ち尽くしていた。マロ号のことだ。必ずまた止めるであろうが、もうここまでが限界だ。どんなに悔しくても、この時間（日没四時四十七分）では追いついて山に入ることは厳禁である。

大声でマロ号を呼びながら、暗くならないうちに県道に出なければと大杉林を走り下り、小道に出るに急いだ。

それにしても、何という強さだ。絶対の自信を持って送り込んだあの一発が当たらない訳がない。

言い訳などするつもりはないが、迫りくる日没と、現場の状況から回り込み、上から攻めたくてもどうにもならない中で、突いて来る大猪から身を守るぎりぎりの崖下までやっと寄りついでの対処であった。

せめてあと一〇分寄りたいたい。そして頭を狙いたい。そう思ったが、崖の上からは丸見えで、一刻を争う状況だった。

大猪はマロ号の攻めに合わせて頭を上下に機敏に動かしている。まずは確実に当て倒すことが大事との思いで、首の付け根を狙ったのだが、あの距離では無理だったかもしれない。

それというの、あれだけの大猪となると首から背中にかけて厚い脂肪で覆われている。その厚さは実に四、五センチくらいあって、外敵と争っても致命傷にならないように身を守っている。

特に首周りは、防弾チョッキを着ているようなものだ。それだから、止め犬を使った止め現場では思い切った近寄り撃つことだと言い続けてきたし、大事な技はやっ

て見せてきた。

それなのに私としたことが、ただ撃つだけの、何でもないミスショットをやってしまったのだ。

残念で悔しいのは、一時間三分も死に物狂いでこの大猪を追い続け、マロ号のお陰でそれこそ今までに見たこともない最高の鳴き

止め現場に立てたというののだ。この大猪と対戦すること三度目にして、初めて巨体を見ることができた。やっとのことで追い切り

攻め、全力で挑んだこの戦いは十中八九、勝ち戦だったのである。せめてあの場では主人の私が頑張

って、マロ号の目の前に「そらマロ、思いきり咬め……」と大猪を転がしてやりたかった。

ただ一頭で丸飲みされそうな化け物猪と勇敢に一時間以上も戦い、ひたすら私のことを待ち続けたマロ号の奮闘に対し、見事な勝

戦で応えてやり、そしてさらなる成長に繋げなければならぬのに、本当に久しぶりの大失敗である。

そんなことを考えながら県道に出てみると、意外なことに北嶋氏

の家から登って来た畑の奥で、いつも猪が足跡を出す猪の渡りの所である。

やっとのこと加藤氏と連絡がついたので、迎えに来てもらった。こんな所まで追って来たことに驚

いた加藤氏は、「もう北嶋さんの家ですよ」。

大山をグルッと回る県道の反対側で猪を追い始めたどん詰りの大

峰から、北嶋家のある所で終わる大沢のどん詰りまで追いつけたことになる。

私がこの大沢で大猪を撃って逃したことを話すと、「銃を撃ったのですか!」と、すぐには信じられない様子である。まだマロ号は

大猪を追っていると告げると、時間切れを盛んに悔しがっている。あたりは既に暗く、ライトをつ

け車で県道をグルッと回って北嶋家の側に出ると、マロ号のシーバーがかすかに入ると、また大峰伝いに車を止めてある入山したあたり

に、本当に久しぶりの大失敗である。そんなことを考えながら県道に出てみると、意外なことに北嶋氏

と走り出し、しばらく追っかけてたが分からなくなった」と車に戻り、ヨシ号とシロ号は回収しているとのことである。

大猪を追い続ける中でも、気になって時々シーバーをヨシ号とシロ号に替えていた。両犬も元気で、止め鳴きがガン、ガン入って

きていたので期待していただけに残念でならなかった。それでもケガもないとのことではとほっとする。

加藤氏も一生懸命頑張ったようで、話を聞くと加藤氏のタツに猪は来ず、やっぱり民家と犬の鳴き

声を目がけるように民家ぎりぎり逃げ続けたそうである。「この猪どもはヨシ号たちを知り尽くした、追われ慣れた大物だ

と思うよ。まあ、仕方ないことで、また次の手を考えましようや」と慰める。

真っ暗な林道を進み車に戻るのと、平野さんとヨシ号、シロ号が迎えてくれた。やっぱり平野さんはシーバーが調子が悪く入らなかつたそうだが、最後まで一生懸命

私とマロ号を追っかけてくれたよ。うで、この戦いぶりはすべて分か

ってくれていた。

三人がそれぞれの立場で全力でやり遂げた結果がこの現実であつてみれば、残念なことではあるが、仕方のないことである。

しかしながら、必ずや明日に繋がる名勝負となつて末長く心に残るだろう。私はそう思つて、耐えられない悔しさをそつと胸におさめた。

「シロ、ヨシ、よしよし。お前たちもよく頑張つたなあ」と、思いきり全身を撫で回してやつた。あの状況下では仕方のないことであつたが、お前たちを見捨てて、成り行き上マロ号と一緒にだつたことを心から詫びていた。

「ごめんな、ジジが行けなくて……」

シロ号もヨシ号もそんなことはけろつと忘れたようにクンクンと大喜びである。

心配していたマロ号は、思いのほか早い六時十五分に真つ暗な沢奥からシーバーが入り出した。加藤氏がジムニーで沢奥に入り、結果を知らせてきたので、シーバー音の一番強くなる奥まで進むと、

峰から駆け下りて来る元気なマロ号がライトに照らし出された。

私は車を下り、大声で「マロ、来い、よしよし」と叫んでいた。いじらしくして、かわいそうで、思わず駆けていた。マロ号は私の姿を見ると尻尾を振り、元気に飛びついて来た。「マロ！ マロ！」と呼び、撫で回し、全身をライトで点検するが、さすがはマロ号、かすり傷一つない。

「よしよし、よく頑張つたな、マロ！」と思い切り抱きしめた。マロ号は車のライトがまぶしそうにクンクンと鳴き、残念そうである。

「ジジが悪い。マロは上出来」と、残しておいたパンを与える。

私はマロ号やヨシ号、そしてブイ号やカツ号、シロ号までもこままのできるようになったことが何よりも嬉しくてたまらなかつた。

加藤氏も平野さんも、あと少しだつた今日の勝負を盛んに悔しがつているが、この悔しさが必ず明日の勝利、つまり獵人を大きく成長させる大事なことなのである。ただ私の心の中では、マロ号

の帰りがあまりにも早いことが理解できず考え込んでいた。

マロ号は昨獵期、ヨシ号と二頭で猪を追つて行ったきり二日間帰つて来なかつた。山梨の獵場は一八〇〇坪もある大山だったが、帰つて来た時ヨシ号は猪の返り血で毛がゴワゴワに固まり、マロ号も赤毛が黒く変色していた。戦つたら勝つ時の突っ込み方を知っている子たちである。

出来る猪獵人ならば分かるように、二頭で猪を殺してしまう戦いをしたということである。

もともと一流芸になつたり、名犬になる犬の若犬時期には、猪に出会つとどこまでも追つて行く暴走タイプが多いものである。

その時期のマロ号の実戦を見て、犬育ての名手の山梨の獵友でさえも、マロ号は未完成の犬たちと一緒に引かないほうが良いと助言してくれた。

私は常に「足の延びる犬をよし」と思っていた。鳥獵でもヤマドリ獵が得意だったので、獵欲が強く、鳥がいれば必ず出す犬、どんな沢でもどんどん突っ込み、沢

下りさせるような犬が好きで、そんなタイプに仕上げて使つていた。

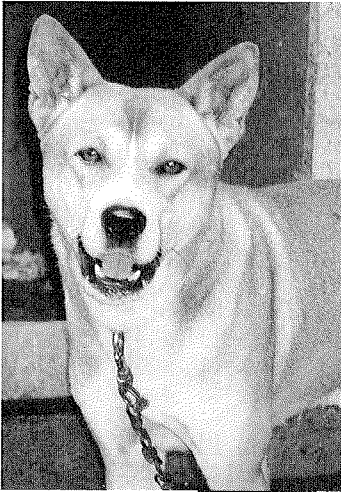
暴走タイプの犬といつても、確かにいろいろあると思う。基本的に良いと思う仔犬は、獵を覚え始めると間違ひなく日ごと足が延びるようになっていくものである。それは獵欲が並外れて強いことであり、猪をどこまでも追うという獵犬の第一条件なのである。

そして、そんな獵欲の暴走犬を絶対に暴走させないように訓練して、思いどおりの単独獵ではこんな犬芸でなければだめだ、と言わしめる名犬に仕上げることが大切である。

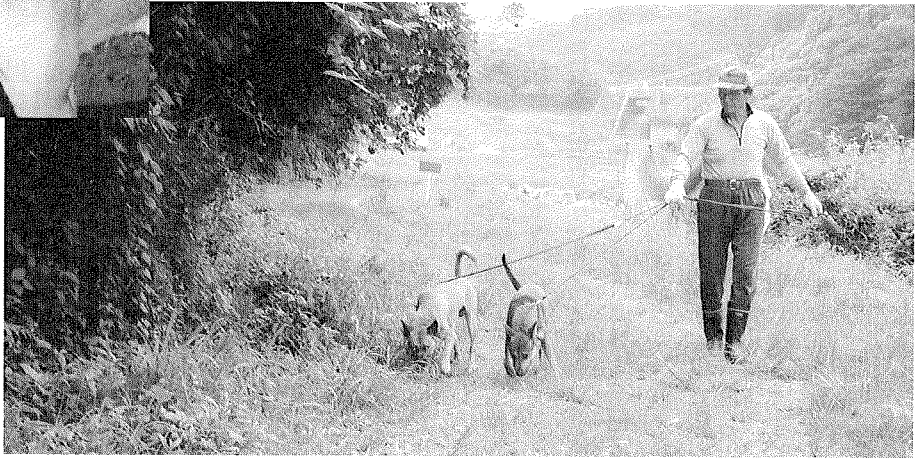
マロ号と言わず、ヨシ号やブイ号、ムサシ号、カツ号なども皆そんな傾向があつた。延び過ぎる足の修正はただ一つ、猪を止めたら必ず撃ち獲ることである。

実戦で止めた猪に逃げられずにもいつも撃つてやれば、主人も犬も猪を追つて遠くまで走る必要はなくなるのである。当然のこと、この大切な止め猪を逃してばかりい

太郎号（田宮系の大切なツル）



どこまで登っても、綱引きの訓練が基本である。毎日、毎日かかさずやるのがポイント。必ず1頭は放して様子を見ながら、一緒に歩くように。絶えず声をかけ、できたら大げさに抱き寄せ、撫でてやること。あくまでも実戦で笑うためにである



たのでは追い犬になり、どこまでも追う犬になってしまうのである。

今では連れて出るとの犬だつて、知らない獵人が見たら足元チヨロ犬と思うような見事な狩り込みであり、犬の動きが急変して姿が見えなくなるとワン、ワン、ワンである。山彦会千葉支部の全員がそんなマロ号たちをよく見てきたし、知るようになっていくが、今日のマロ号の様子に気づいてくれるまでにはまだなっていないようだ。

大猪を逃して残念な気持ちに変わりはないが、マロ号がいつも迎えに来るようにクンクン鳴くのを、もうそれまでと抱きしめ車の箱に入れる時の気持ちは、それこそマロ号やヨシ号と何百回も山に出と一緒に実戦を繰り返した、血の出るような実績がなければ決して分からなくて当たり前である。私は敗戦で知った、今日の戦いの神髄がはっきりと見えたような気持ちになっていた。時間切れで撃ち逃した現場の確認もせず、大猪に咬みを入れ絶対に逃すまいと

必死に食い下がるマロ号に大声で「帰ろぞ、来い、来い」と怒鳴りながら見捨てたのだ。

帰り道でちょうどマロ号が越えた大峰の反対側でマロ号のシューバ一音が入ったが、鳴き声は入らなかった。時間にして三十分も経っていないのにおかしいなと思っていた。あの現場であればど狙って撃った二発である。

銃声で元気づいたマロ号が大猪といえども止められないわけがない。さらに止めれば得意の居竦めで、今度こそはと一時間や二時間は当然のこと鳴き通すはずである。

それなのに三十分も経っていない時点で鳴き声が入らず、一時間くらいであんなに元気で尻尾を振ってクンクン鳴きながら帰ってきた。私がおかしいと思ったのは、マロ号のいつもの行動と併せ考えたからである。

あの犬は大猪を越えたあたりでこけたな……と思ったが、悔しがついている二人に想像でそんなことを言ってみたとこで分かってくれるはずもなく、仕方のないこ

とである。

真っ暗でもうどうにもならない中で、心を迷わすよりは、全力でみんなが見事に戦い切った。犬たちもみな無事である。そのことを何よりの収穫と思ひ、よしとすべしである。

基本的に戦うからには勝つか、負けるかのどちらかである。どんな名勝負であっても、両者が並び勝つことなどできないのである。そこで問題になるのは勝敗もさることながら、大切なのはどのような戦ったかという戦いぶりであり、全力を出し切り、心残りはないかと自ら反省する気持ちこそが重要である。

そんな観点からも、この紙一重の敗戦は三者が三様、全力を出し切つて猪との戦い方を学んだのである。

この実戦で知つた体験こそが大事件なのであり、この先の猪猟にもをいうのである。

おしなべて勝負は時の運といわれるように、勝ち負けは天のみが知ることであるが、敗因は当然のこと、自分で分かっていることな

のだ。必ず分析しきちつと検証して、次の実戦でうまく生かして使えばよいのである。

その辺のことが確実に実行できるならば、今日の戦いは見事な敗戦で結構ではないか。私はそう心に決め、元氣を出し、笑顔でご苦労さんでしたと締めくくつた。

ちなみに、逃げた大猪はその後猟期が終わるまで一回も足跡を消さず、ぱったりと猟場から姿を消した。やっぱりマロ号は大猪を追い、倒れたのを見届けた上で喜々としていつものように尻尾を振つて私を迎えに来てくれたのだ。

マロ号はすごい子になったものだ。私はそう確信するに至つたが、残念でたまらないのは、マロ号のそんな気持ちがあつていながら、あの日没という状況下ではどうにもしてあげられなかつたことと、あたら名物猪を野に朽ち果てらせてしまったことである。

猪猟人の夢の対戦相手であり、共有財産ともいふべきまたとない名物猪を、どんな理由があるにせよ、倒れた現場も確認せずに終わらせてしまった。

私はどうか元氣でいてくれよ……と、猟期中はその猟場を狩るたびに祈るような気持ちで探し回り再対決を願つたが、二度とあの名物猪の巨体を見ることはできなかった。マロ号を撫でるたびに、ドキドキするあのすごい止め現場がよみがえるのにはさすがに困つたものである。

「ごめん、マロ」

大失敗を引きずつて、口癖のようになつてしまふ私のそんな言葉をマロ号は分かっているみたいにくんくん甘えているが、あの大一番を境に急成長を遂げ、身体まで一回り大きくなつて堂々たる先犬になつてくれた。

ヨシ号、シロ号、そして二秋目のブイ号、カツ号、武蔵号、千代号の兄妹犬や二代目の若犬、ゲン号、ブル号、クマ号なども素晴らしい一芸を繰り出すまでに仕上がつてきた。

北嶋氏たちも、そんな犬たちが作つてくれる絶好のチャンスには負けじと攻め込み、若者らしく元氣でものの見事に勝ち獲れる立派な猟人になつてきている。

特に平野氏は私と同年年で、何十年も地元の大物クラブで頑張つてきた実績あるベテラン猟人である。ベテランや達人、親方などは猪猟のやり方も決まつていて、なかなか他人の意見は聞かないのが普通であるが、平野氏は私と犬たちを信じ、実戦をよく見てくれ、話も聞いてくれている。

その上で、猪猟の要は分かりやすい方法で率先して教えているのが何より嬉しく、心強い存在になつている。

北嶋氏も加藤氏も実力をつけ急成長している。もう少しだ、あと一押しすれば夢の頂点である。あと残すは三十日。敗戦など引きずつていない。何としても、さらに自己流を押し出して、一気に頂点まで駆け登らなければならぬ。

幸いなことに、山に慣れ体も絶好調、若者たちをひっぱつて先頭を走る自信もある。目いっぱい、自分を追い込み、最高の猪猟を見せてあげたい。そんな思いで今日を生きている。